

(史料紹介)

外務省所蔵の内務省文書について

——『社会主義者沿革及現況』『社会主義者沿革第一(第一版)』『社会主義者沿革第二(第一版)』を中心にして——

佐々博雄

解説

平成四年、『外務省外交史料館所蔵 外務省記録総目録』第一巻、第二巻、別冊の三冊が原書房から出版された。この総目録の出版により、明治・大正・昭和戦前期に関する外務省記録の全貌を身近に見ることができるようになった。

この総目録の分類項目中には、「警察」、「危険思想取締」に関する項目があり、そこには、今まで所在の知れなかった内務省関係の文書も含まれていた。本稿では、『外務省記録総目録』第一巻(明治大正編)に掲載されている四門三類一・二項「危険思想取締」分類の中から『社会主義者沿革及現況』『社会主義者沿革第一(第一版)』『社会主義者沿革第二(第一版)』を中心に紹介する。

内務省警保局が作成し、政府部に極秘文書として配布した社会主義者に対する監視取締についての報告書の一部は、戦後、近代日本史刊行会、明治文献資料刊行会によって発行され、さらに昭和五九年、

昭和六一年には、みすず書房から、それらの集大成とも言うべき『続・現代史資料1 社会主義沿革1』及び『続・現代史資料2 社会主義沿革2』が復刻刊行された。このうちの『続・現代史資料1』には、『社会主義者沿革』第一(明治四十一年七月現在)、同第二(明治四十二年七月現在)、同第三(明治四十四年六月現在)、それらの続編『特別視察人状勢一斑』第四(大正三年六月現在)、同第五(大正四年六月現在)、同第六(大正五年五月一日現在)、同第七(大正六年五月一日現在)、同第八(大正七年五月一日現在)、同第九(大正八年十一月一日現在)が収録され、また、『続・現代史資料2』には、大正九年から昭和四年までに内務省警保局と警視庁が作成した社会主義者取締経過報告書が収録されている。

しかし、松尾尊允氏の解説によれば、『続・現代史資料1』に収録されている『社会主義者沿革』第一(明治四十一年七月現在)、同第二(明治四十二年七月現在)の両方ともに第二版であり、最初に作成された第一版の存在は、不明とされてきた。また、『社会主義者沿革』

の出現についても、『原敬関係文書』第八巻（日本放送出版協会刊）の中にある社会主義者視察取締関係の資料によって、明治三十七年頃から社会主義者に対する政府の調査が始まったとしているが、この時期の調査が直接、どのように『社会主義者沿革』作成と関わったかについては、明確ではなかった。

だが、先の『外務省記録総目録』の公刊により、『社会主義者沿革』第一、同第二の第一版が、外交史料館に所蔵されていることが確認され、また、新たに、『社会主義者沿革』の原形と認められる明治三十七年十月調の、『社会主義者沿革及現況』の所在が明らかになったのである。

そこで、まず、『社会主義者沿革及現況』について述べてみることにする。外務省記録『過激派其他危険主義者取締関係雑件』本邦人ノ部一（第四門三類二項一号一）の記録中に、明治三十七年十一月九日付、内務省警保局長有松英義より外務省参事官倉知鉄吉宛の書簡が含まれている。その書簡は次のようなものである。

明治三十七年十一月十日接受 機密受第二九六五号

拝啓 過日御依頼申上候 社会主義者ニ関スル書類至急入用之義有之候間 御案務中恐縮ニハ候得共 右御繰上可成速ニ御回送相成様御配慮煩ハシ度 此段得責意度候

十一月九日

倉知参事官殿

有松警保局長

敬具

追テ別紙御参考ノ為メ御回送申上候間 御届之節大臣次官へ供覧方可能御取計被下度此段申添候 不一

この書簡においては、内務省から外務省へ依頼していた社会主義者に関する調査書類（この調査書類は、おそらく、この時期オランダにおける社会党万国会議への参加を目的として、明治三十六年十二月から米国に渡った片山潜などに関する調査報告と思われる。）を、至急入用になったので回送して欲しいという内務省警保局長からの要請と、内務省の別紙参考書を送付するので大臣、次官へ供覧して欲しいと言ふことなどが書かれており、その書簡と共に、秘印がある明治三十七年十月調『社会主義者沿革及現況』という小冊子が綴じ込まれている。この『社会主義者沿革及現況』が内務省から回送された「別紙」と考えられる。

『社会主義者沿革及現況』が調査された明治三十七年十月という時期は、日露戦争の真只中で日本軍は旅順攻撃で苦戦を強いられていた時期であり、一方で、平民新聞を中心に非戦・反戦論が激しくなり、翌月の十一月には、平民新聞が発禁処分を受け、また社会主義協会が禁止されたりした時期でもあった。政府が社会主義者に対する取締を開始する直前に調査作成された『社会主義者沿革及現況』の内容は、後

の『社会主義者沿革』のように、凡例や目次はないが、明治三十年の社会主義研究会の成立から社会主義協会、社会民主党、社会平民党、復興社会主義協会、平民社への変遷についての記述や「社会主義ノ概」、「社会主義協会会則」など、『社会主義者沿革』にも記載されている事項も書かれており、まさに、この後、作成される『社会主義者沿革』の原形とも言うべきものである。また、特徴としては、平民新聞社に関する調査が、この『社会主義者沿革及現況』の内容の多くを占めていることである。このことは、時の桂内閣が、世界的な社会主義運動の拡大を背景とする平民新聞社の活動に脅威を感じ始めていた証でもあった。そして、調査の翌月には、彼らへの取締を開始したのであった。

次に、『社会主義者沿革』（以下『沿革』と略す）第一、同第二の第一版について見てみることにする。

『沿革』第一（第一版）が、内務省から外務省に届けられたのは、左の史料が示すように『沿革』第一が調査された明治四十一年七月から一年後の、明治四十二年八月二十三日であった。

警秘牒第三四号

社会主義者沿革別冊壹部為御参考差進候也

明治四十二年八月二十三日

内務省警保局長有松英義

外務大臣伯爵小村寿太郎殿¹⁾

なぜ、この時期に一年前の『沿革』第一（第一版）が外務省へ配布されたのか、その理由はよく分からないが、外国における社会主義者・無政府主義者の活動が活発化してきたことと関係があるのかもしれない。

また、『沿革』第一（第一版）が、内務省から外務省に届けられたのは、左の史料が示すように、明治四十二年十二月十八日であった。

警秘牒第五二号

社会主義者沿革第二編別冊壹部為御参考差進候也

明治四十二年十二月十八日

内務省警保局長有松英義

外務大臣伯爵小村寿太郎殿²⁾

以上のようにして『沿革』第一、第二（第一版）が外務省に配布されたのであるが、次に、第二版との異同について検討してみることにする。

まず、『沿革』第一、第一版と第二版との違いを、それぞれの目次と頁数との比較で、見てみることにする。

『社会主義者沿革 第一』 第一版		『社会主義者沿革 第一』 第二版	
目次	頁	目次	頁
第一 総説	一	第一 総説	一
第二 社会主義者ノ団体及各派並其機関	一	第二 社会主義者ノ団体及各派並其機関	一
(一) 社会主義者ノ団体	一	(一) 社会主義者ノ団体	一
(イ) 解散、禁止又ハ消滅ノモノ	一	(イ) 解散、禁止又ハ消滅ノモノ	一
(ロ) 現ニ存在セルモノ	二	(ロ) 現ニ存在セルモノ	二
(二) 社会主義者ノ各派	六	(二) 社会主義者ノ各派	六
(三) 社会主義者ノ機関	六	(三) 社会主義者ノ機関	六
(イ) 廃刊ノモノ	六	(イ) 廃刊ノモノ	六
第三 社会主義者ノ員数及其主ナル者ノ身分性行経歴	七	第三 社会主義者ノ員数及其主ナル者ノ身分性行経歴	七
(一) 東京府	七	(一) 東京府	七
(二) 地方	八	(二) 地方	八
第四 社会主義者ノ行動	九	第四 社会主義者ノ行動	九
(一) 東京ノ部	一〇	(一) 東京ノ部	一〇
(イ) 合同時代	一〇	(イ) 合同時代	一〇
(ロ) 過度時代	一〇	(ロ) 過度時代	一〇
(ハ) 分立時代	一〇	(ハ) 分立時代	一〇
(一) 片山派	五〇	(一) 片山派	五〇
(二) 西川派 一名本郷組トモ云フ	五一	(二) 西川派 一名本郷組トモ云フ	五一
(三) 木下派	五五	(三) 木下派	五五
(四) 堺派 初メ幸徳	五七	(四) 堺派 (元幸徳派)	六二

派ヲ以テ目セラレタルモノニシテ一名柏木組トモ云フ	五七	一名柏木組トモ云フ	六二
(二) 地方ノ部	六一	(二) 地方ノ部	六一
(イ) 一般ノ行動	六一	(イ) 一般ノ行動	六一
(ロ) 特殊ノ行動(足尾銅山暴動事件)	六五	(ロ) 特殊ノ行動(足尾銅山暴動事件)	七〇
(三) 雑ノ部	七一	(三) 雑ノ部	七六
第五 米國ニ於ケル日本社会主義者	七二	第五 米國ニ於ケル日本社会主義者	七七
(一) 起源	七二	(一) 起源	七七
(二) 黨員及其動靜	七四	(二) 黨員及其動靜	七九
(三) 不敬事件	七五	(三) 不敬事件	八〇
(四) 当局者ノ措置	八四	(四) 当局者ノ措置	八九
(五) 目下ノ状況及外部トノ關係	八四	(五) 目下ノ状況及外部トノ關係	八九
(六) 帰朝者ノ行動並経歴	八五	(六) 帰朝者ノ行動並経歴	九〇

(★傍線部分が『社会主義者沿革第一』第一版と異なるところである。)

右のような表になり、『沿革』第一、第二版は第一版の増補版であることが明らかになった。すなわち、第一版より第二版が全体で五頁の増加となっており、増加された部分は「社会主義者ノ行動」における合同時代と分立時代の間設けられた「過度時代」の部分であった。合同から分立への各派の動向をより詳しく記述しておく必要から設けられたものと思われる。

次に、『沿革』第二における第一版と第二版の異同について見てみることにする。

『沿革』第二においては、『沿革』第一の場合と異なり、第一版の頁数と第二版の頁数も同じであり大きな異同は見当たらない。しかし、いくつか第二版で加筆されているところもある。第二版の目次では、第一版では記載のない「堺派」の下に「元幸徳派」の加筆があり、また「社会主義者ノ団体」の項では、国民議会に関する数行の「附記」が加筆されている。以上が『沿革』第二における第一版と第二版の異同の主なところであり全体として大きな異同はなかった。

以上、『社会主義者沿革及現況』、『沿革』第一、第二を中心に紹介してきたが、外務省外交史料館には、この外に、『社会主義者沿革』第三から「特別要視察人状勢一斑 第九」までの報告書や『沿革』第一の別冊として作成された『米國ニ於ケル日本人 社会主義者無政府主義者沿革』など一連の内務省作成の報告書が所蔵されており、それらの報告書と共に、海外在住社会主義者の「原籍、住所、身分、崇拜者、性質、行動、経歴等」を記した「名簿」も存在しており、国内社会主義者の「名簿」の所在が現在不明であることから貴重な史料とすることが出来る。また、外国における「過激派、危険主義者」に対しては、内務省と外務省間の往復資料を散見することができ、内務省もそれらに深い関心を示していたことが理解できる。

このように、外務省所蔵の内務省文書は、社会主義者と外国との関わりを明らかにするためには、欠くことのできない史料であり、中国

人、朝鮮人に対する取締の調査報告書などと共に重要な史料といえることができる。

なお、本稿では『社会主義者沿革及現況』の全文を掲載しておく。

- 註
- (1) 外務省記録『内務省編纂「社会主義者及無政府主義者沿革」』（四門三類一項二一〇号）一冊。機密受第二四六〇号、明治四二年八月三日、有松英義より小村寿太郎宛。なお、『沿革』第一と第二は手書き謄写版で『沿革』第三から活字版となった。
 - (2) 同前。機密受第三七七五号、明治四二年二月一日、有松英義より小村寿太郎宛。

(表紙) (関係者印有り) (手書 寒天版)

珍田 (印) 山座政務局長 (サイン) 倉知 (印) 坂田 (印)

(朱印)

秘

社会主義者沿革及現況

明治三十七年十月調

社会主義者沿革及現況

明治三十年頃ニ社会主義研究会ナルモノ起リ、芝区四国町ユニテリアン教会内ニ設置シタリ、其発起首唱セシ人名ハ左ノ如シ

安部磯雄 村井知至(女子大学講師)

佐治実然 平井金三 岸本能武太郎(高等師範学校教師)

等ニシテ次デ幸徳伝次郎、松村廣太郎(東京朝日新聞記者)、横山源之助等加入シ、又後ニ片山潜、西川光次郎等ノ加盟スル所トナレリ

社会主義研究会ノ事業トシテハ、其頃毎月一回ツツ右ユニテリアン教会内ニ於テ講演会ヲ開キ互ニ意見ヲ吐露シ以テ研究ノ資料ト為セリ、当時会員ノ数ハ漸ク十四五名乃至二十余名許ナリシト云フ

尔来益々拡張主義ヲ講シ三十三年五月名称ヲ改メテ社会主義協会トナシ、会員ヲ募集シ兼テ東京市内ヲ始メ地方々々ニ向ヒ伝道ノ策ヲ取ルニ至ル、進ンデ教会ノ率先首唱ニテ社会党ヲ組織スルノ計画ヲ立テタリ、当時日本鉄道会社内ニ於テ矯正会ナルモノアリシガ、此会ハ有力ナル団体ニシテ、恰モ其頃労働問題研究ノ声世間ニ喧シキ際ニシテ、一般労働者ガ選挙権ヲ獲得セント欲シ、政治運動ノ必要ヲ感ズルト同時ニ其活動ヲ始メタリ、是ニ於テ社会主義協会ノ名ヲ変更シテ社会民主党ト標榜シ是レガ宣言書ハ安部磯雄ノ執筆ニシテ、東京市内其他ニ配附セシニ其筋ノ差押フル所トナレリ、而シテ該宣言書ハ市内ノ各新聞社皆其掲載ヲ禁止サレシニ、日出国、萬朝、毎日ノ三社ハ掲載セシヲ以テ発売頒布禁止ノ命ニ接シタリ、当時片山潜ハ労働者社会主義研究ナルモノヲ組織シ多数ノ同意賛成者アリシガ共ニ訴ヘラル所トナリ終ニ罰金四十円ヲ科セラレタリ

社会民主党ハ其筋ノ敵命ニ依リ終ニ解散シタリ、其後安部磯雄、片山潜、

幸徳伝次郎、木下尚江、川上清(萬朝報記者)、西川光次郎等ハ相謀リテ再ビ社会平民党ナルモノヲ組織シ、警視庁ニ届出デシモ其許可ヲ得サルヲ以テ名称ヲ以前ノ社会主義協会ニ復シ非政社団体ト為シ、再ビ届出デシガ辛フジテ許可サレシト云フ

社会主義研究会ノ団体ガ非政社組織トナリシヨリ頓ニ加入者ノ数ヲ増加シ来リ、特ニ現今ノ会員中ニ於テ其多キヲ占ムルモノハ学生及ビ青年労働者ナリトス

是レヨリ先キ片山潜ハ労働者、社会主義者ノ機関トシテ雑誌「労働世界」ヲ発行シ居リシガ其経費ノ補助ハ重ニ鉄工組合ヨリ仰ギタリ、今ハ廃刊ニ属セルガ其代リニ現今専ラ「社会主義」ナル雑誌ヲ発刊シ意見ヲ発表シ居レリ、近クハ日露戦争以来傍ラ渡米協会ナルモノヲ組織シ新渡米、渡米案内等ノ書ヲ著ハシ其目的トシテハ世人ニ渡米ヲ奨励シ居レリ、近時又労働者ノ需要者ト供給者トノ仲保人トナリ専ラ相方ノ為メ種々周旋ノ勞ヲ取レリ、「社会主義」記者山根吾一ナルモノ片山ノ事業ヲ補佐シ従事シツゝアリ社会主義協会ノ非政社トナリシ以来其事業トシテハ隔月一回大演説会、毎月二三回小演説会、又其附帯事業トシテ毎月第二日曜日ニ社会主義婦人講演会ヲ開催スルヲ例トナセリ、然シテ将来ノ大目的トシテハ普通選挙権ヲ獲得シ進ンデ社会主義代議士ヲ出シ以テ社会党ヲ組織セントスルニアリト云フ

尚ホ其附帯ノ目的トシテハ工場法、小作条令、移民会社取扱条令等ノ発布ヲ促シ、貧富ノ懸隔ヲ阻絶シ一般労働者ノ利便ヲ計リ其妨害物ヲ防禦抑制スルニアリト云フ

昨年春矢野文雄ノ新著「新社会」発行トナリ、次デ十一月ヨリ「平民新聞」ノ生ルヽヤ大ニ世人ノ眼目ヲ引キ且ツ一層ノ注意ヲ与フルニ至リタリト、

特ニ社会人道ノ為メニ非戦論ヲ唱道スルニ在リト云ヘリ

社会主義協会ハ今ヤ白耳義ノ萬国社会党本部ニ脈脈ヲ通ジ書冊、新聞雜誌等ノ交換ヲナシ且ツ年々其費用中、金四十円ツヽヲ送ルヲ約シ已ニ二回ノ送付ニ及ビタリト

全国各地地方ニ平民新聞読者会又ハ平民俱樂部、社会クラブ様名目ノ下ニ同志者ノ時々集マリテ社会問題ヲ研究ス、折々其招請ニ応ジテ東京本部ヨリ會員出席シテ遊説演説ヲ為ス

會員ノ數ハ名簿記載ヲ算スレバ全国ヲ通ジテ五千以内トス、東京市ハ凡三百人ナルガ主義熱心ナルモノハ百五十人内外アリト云ヘリ、特ニ青年学生、鉄工組合、活版組合職工ニ多シ

平民新聞昨今ノ発行部數ハ凡四千五百ニシテ平民社直接ニ發送ノ分ハ二千ニ垂ントシ、其他ハ受売所又ハ取次所ヨリ發スルモノナリト目下同社維持費トシテ寄附金募集中ナルガ募集總金額ハ二千円ノ目安ニシテ募集期限ハ来年七月末日ナリ其上ニテ日刊トナスノ計画ナリト云ヘリ、今本月初日(三十七年十月三十日)迄ノ募集合計金ハ四百五十二円十九錢ナリト云フ

社会主義協会ノ役員姓名ハ左ノ如シ(平民新聞社内ニ設置)

會長 安部磯雄 幹事 西川光次郎 幹事 齊藤兼次郎

昨年十一月平民新聞発行以來現今ニ至ル迄「社会主義ノ概」及ビ協会の規則ヲ東京及ビ地方ニ配布シタルハ約三万五千部ナリト云フ、其文章左ノ如シ

△今の社会は貴族と富豪と地主と資本家との社会也、社会主義は此社会を人民全体の社会と爲んと欲するものなり

△今の社会は階級の社会也、貧富懸隔の社会也、何人も必ず生活の不安を感じるの社会也、社会主義は一切の階級と懸隔とを打破して万人衣食住安全の社会を作らんと欲するもの也

△今の社会は貧困、欠乏、飢寒、疾病、压制、束縛、酷待、掠奪、墮落、犯罪、売淫、自殺等あらゆる悲惨と罪惡とを製造する社会也、社会主義は総て是等の罪惡と悲惨とを此社会より一掃せんと欲するもの也

△今の社会は国家相戦い人民相殺すの社会也、社会主義は人種相親しみ人民相和するの社会を現出せんと欲するもの也

△今の社会に苦しみ、今の社会を悲しみ、今の社会を改革せんと欲するものは直に來つて社会主義協会に投ぜよ

社会主義協会々則

一、會員は一定の職業を有し社会主義を信する者に限る

一、入会を希望する者は住所、姓名、年齢、職業及び如何にして社会主義者となりしかを記して幹事に申込むべし

一、本会は茶話会(隔月一回)、大演説会(同上)、小演説会(毎月数回)、婦人講演会(毎月一回)等を開き、又時々地方に遊説することあるべし

一、本会は当分の中、週刊「平民新聞」及び月間雜誌「社会主義」を以て機関とし諸般の会務を報告す

一、本会は毎月会費五錢を徴収す

東京市麹町区有楽町三丁目一番地

社会主義協会

右ハ會長安部、幹事西川、齊藤ノ名ヲ署シテ發シタリ

平民新聞 本社直接地方発送表 (二十七年七月中旬調査ノモノ)

神奈川	二七	京都	二五	山口	一四	宮城	八
千葉	三四	大阪	一五	広島	九	岩手	九
栃木	一六	兵庫	三四	岡山	二一	山形	四
群馬	五五	徳島	三	島根	一六	青森	一七
埼玉	一八	高知	三七	鳥取	六	北海道	九七
茨城	二九	愛媛	八	福井	三	台湾	一四
静岡	三四	大分	五	石川	一〇	清国	五
愛知	一一	宮崎	八	富山	八	韓国	四
岐阜	二二	鹿児島	六	山梨	九	在外軍隊	三
滋賀	四	熊本	一〇	長野	四四	欧米	四〇
三重	八	長崎	二四	新潟	三五	東京	四五三
和歌山	二〇	佐賀	九	秋田	二六		
奈良	八	福岡	二八	福島	二二		
合計	一、四〇三						

右ハ平民社直接読者ニシテ是レニ二倍セル各売捌所ヨリノ読者ハアレド、
本社ニ於テハ其取調ハ出来ストナリ

社会主義協会ハ恰モ平民新聞社ト兄弟一家暮シノモノニシテ一般平民社ニ
於テ其枢機ヲ握リ其事務ヲ執行シ居ルモノナリ

平民新聞社ノ会計相談役ハ左ノ人々ニシテ平民新聞一切ノ責任ハ石川三四
郎、西川光次郎、幸徳伝次郎、堺利彦ノ四人ナリトス

相談役ハ

小島龍太郎 加藤時次郎 安部磯雄 佐治美然 木下尚江

ニシテ小島ハ創立ノ際、保証金ノ千円ト其後ニ又百五十円トヲ貸与シタリ、
又平民社ハ加藤ニ七百五十円ノ負債アリト云フ

最近同社ノ八、九両月ニ於ケル経済内容ハ左ノ如キモノナリト云フ

三十七年八月分

収 入		支 出	
前月繰越金	七四、三五一厘	取次書籍仕入	二七、四四七厘
新聞代	三八一、一三五	雑費	二五、八一三
書籍代	一七九、一四二	通信費	二五、八一三
雑収入	五三〇	切手買入	七〇、五八〇
広告欄収入	一六、〇一〇	集金社手数料	二、一〇〇
		堺夫人香典	二〇、〇〇〇
		俸給及報酬	二〇、〇〇〇
		広告費	四三、三六〇
		新聞印刷費	一五九、二一〇
		書籍印刷費	五一、九九〇
合計	六五一、一六八	合計	六一〇、三三八
差引残金	四〇、八三〇		

右表ノ如クニシテ八月ハ收支相償ヲ得タルニ依リ、寄附金ニハ手ヲ附ケ
ズ其儘銀行へ預入シタリト云フ

三十七年九月分

収 入		支 出	
繰越金	四〇、八三〇厘	新聞印刷費	一七八、一三〇厘
新聞代	二九五、七五八	書籍印刷費	一〇〇、〇〇〇
書籍代	二九六、五二九	俸給及報酬	一七一、〇〇〇
広告収入	二八、三四〇	広告料	三八、八〇〇
雑収入	六、二一〇	取次書籍仕入	五五、七九六
寄附金	一〇〇、〇〇〇	切手買入	六八、九五五
		新聞書籍買入	二〇、五〇〇
		家賃	一八、〇〇〇
		勝手方費用	二五、二〇〇
		雑費	四〇、九〇三
合計	七六七、六六七	合計	七一七、二八四
差引	五〇、三八三(翌月へ繰越ス)		

右ノ如クニシテ九月分ハ寄附金ヨリ百円ヲ支出シタルモ、前月繰越金四十円余ナリシニ依リ、正味ハ六十円ノ不足ヲ生ゼリ、尚ホ同社ハ書籍、印刷費其他ニ於テ大分負債ヲ帯ブレバ其穴埋メノ為メ絶ヘズ寄附金ヲ仰ク考案ナリト云フ

(寄附金現在高)七三三、八三〇(但三十七年十月一日)

地方特約取次所ニシテ平民新聞及平民文庫ノ書籍ヲ発売スル箇所ハ左ノ如シ

札幌南一條西六丁目

友花堂

名古屋市馬喰町

誠進堂

横浜市福富町

花田新聞店

信州小県郡神川村

山辺清太郎

岡山市栄町

吉田朔七

信州松本大名町

丸山尚

埼玉県本庄町

五十嵐商店

平民新聞社ガ社会主義拡張ノ為メ平民文庫トシテ出版シ各地ニ遊説ノ折、一々之ヲ携ヘ行商売附ケ居ル唯一ノ書籍ハ左ノ如クニシテ、外ニ種々新著ニ係ル社会主義ヲ唱説シタル書物ハ取次発売シ居レリ

社会主義入門

価 十銭 三版

百年後の新社会

五銭 〃

小説火の柱

三十五銭 四版

消費組合の話

十二銭 二版

地上の理想国 瑞西

十五銭 初版

社会民主党建設者ラサール

十五銭 〃

土地国有論

十銭 〃

経済進化論

十五銭 〃

以上ノ書物ヲ車ニ載セ両人之ヲ引キ主義拡張行商伝道ノ為メ非常ノ熱心ヲ以テ苦酸ヲ忍ビツゝ小田頼造、山口義三ノ両人ハ十月初旬東京ヲ発シ、東海道遊説中ニシテ馬関ヲ終点トシ明春ヲ期シ、帰京スベキ予定ニシテ両三日前静岡地方ニアリシト云フ

社会主義協会、平民新聞社ガ各地方ノ団体ト気脈ヲ通ジ居ルモノハ左ノ如シ

直行団(消費組合)

東京京橋木挽町

岡山いろは倶楽部
 社会主義茶話会
 水戸共同研究会
 牟婁青年団体
 平民倶楽部
 社会主義有志談話会
 伊勢崎青年会
 佐波郡青年会
 上田青年会
 兵庫県読者会
 名古屋社会主義研究会
 黒潮会談話会
 横浜平民結社茶話会
 下関社会主義者茶話会
 平民倶楽部講演会
 川越社会主義研究会
 宇都宮社会主義研究会
 函館読者会
 西多摩弘道会
 諏訪社会主義研究会
 飛騨読者会
 信州神川読者会
 新屋社
 大阪平民新聞読者会

岡山市
 北海道夕張
 水戸市
 紀州田辺
 箱根大平台
 千葉県福岡町
 信州伊勢崎町
 信州
 信州上田町
 神戸市兵庫出町
 名古屋市矢木方
 長野市
 永楽町
 下関東南部町
 丹波峯山町
 川越六軒町
 本丸旧城館
 訓盲会内
 東京府西多摩村
 上諏訪角間町
 高山町
 神川山辺方
 出雲安楽町
 大阪上住吉

早稲田社会学会
 大日本労働団体連合本部
 青年修養会
 普通選挙青年同志会
 活版誠友会
 鉾毒問題解決期成同志会
 労働組合会
 鉄工組合会
 青年国民党
 普通選挙同盟会本部
 右諸会ハ現今密接ニ社会主義協会ト平素気脈ヲ通シ居ルモノナルガ、中ニハ公然ト看板ヲ掲ケ標示スルモノハ鮮少ナリト云フ
 社会主義協会員ニシテ最モ熱心ニ文筆言論ヲ弄ビ、東京市内又ハ各地方団体同志者ノ招聘ニ応ジ遊説演説ヲ事トセル重ナル人々ハ左ノ如シ
 ○安部磯雄 ○幸徳伝次郎 ○木下尚江 ○堺利彦 ○西川光次郎
 ○佐治実然 ○田添鉄一 ○加藤時次郎 ○齊藤兼次郎 ○岡千代彦
 ○石川三四郎 ○小田頼造 ○山口義三 ○安藤兔毛喜 岸山芳太郎
 ○吉田磯 杉田政太郎 幸田久太郎 ○斯波貞吉 白柳武司
 ○大亦橋太郎 菊池茂 山田金市郎 中村直行 築田右一
 ○加納豊 ○松崎源吉 ○原真一郎 ○片山潜 ○山根吾一
 ○中村太八郎
 右等ガ重ナルモノニシテ○印ノ者ハ社会主義協会中特ニ熱心家ト称セラ
 ル者ナリ
 東京ニテ平民社ノ出版物ヲ大売捌キ又ハ同社ノ為メニ時々発スル概文印刷

物ヲ顧客ニ配附ナドヲ囑託サル、書林ハ左ノ如シ

東京堂 神田、上田屋 神田、東海堂 京橋、北降館 京橋、

盛光堂 下谷、良明堂 京橋、鶴聲堂 小石川、

外ニ文庫ノ売捌トシテ福音社（大阪）友花堂（札幌）花田新聞店（横浜）
等アリ

△平民新聞社へ向ケ本年九月中旬頃、瑞西ニ設置シアル露国社会党本部ヨ
リ数部ノ書籍、小冊子、檄文等ヲ送り来リテ露国捕虜ニ其配附ヲ依頼シ来
リタリト、又社会党万国本部ヨリシテ万国大会提出ノ報告及議案ヲ送致シ
来レリト、尚露国社会革命党本部ヨリ、ブレヴェノ罪状ヲモ送来シタリト
云フ

以上

◎出典 外務省記録『過激派其他危険主義者取締関係雜件』本邦人ノ部一。

なお、このファイルは全部で十八冊あるが、それらの一番最初にこの史料は綴じられている。

（本学教授・国史学）